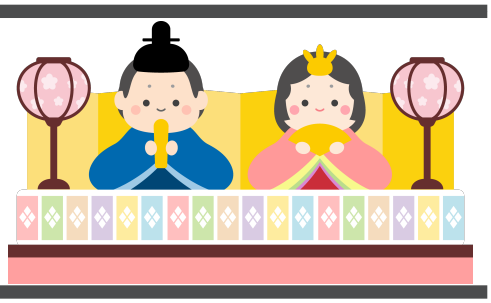
【特集／雛祭り】

ホビーとしての雛祭り



祭事は収穫や神仏への祈願から出発。病気退散、ご先祖様への祈り、豊作への感謝。中国伝来五節句の一つ上巳節句・桃節句はいつの間にか雛遊びから雛祭りに。宮中祭事・遊戯から武家式楽。普及する中で七夕同様大きく変遷。現在の雛人形を飾る風習は江戸時代に定着したと言われ、江戸中期からは京・江戸で多くの人形店と名人形師が現れ、明治・大正時代人形作りは和伝統工芸として各地で全盛時代を迎えた。雛祭りへのアプローチは①民俗学②玩具史（人形論）③遊戯史（文化論）が主。近年、催事がハロウィンや恵方巻きのような商業主義宣伝や幼稚園で盛んなように教育社会学からの研究論文も出ている。柳田國男に始まる民俗学は多くの祭事風習を明らかにした一方、常民主義は非歴史的で遊戯史の観点に欠けがち。一方生活史としての玩具史は明治大正の玩具愛好家・好事家を中心にした収集保存中心で、現在その名残が各地の美術館・玩具博物館で見られる。雛人形は明治後半の三越・高島屋といった百貨店を中心とした伝統文化復興とも深い関係を持つ。（ホビー研究家 黒石小次郎）

※雛祭りは伝統的行事のため「祭事」を主として使用します。
（催事＝商業的イベント。イベントは国際会議・スポーツ・コンサートといったエンタメ・常設系興行を含む広い概念）

起／桃節句から雛祭りへ

雛祭りの定着

五節句は中国から渡来＜図表1＞。奇数並びで陰陽五行説と関係深い。平安時代宮中に定着、江戸幕府も五節句を祝った。旧暦で七夕のように季節と合わず現在では八月に行われる祭りもある。明治六年（1873年）太陽暦採用後、五節句廃止。五節句の中で重視された重陽節句はいち早く廃れ、七草は正月付録。端午節句は戦後、長期休暇の一つとして祝日指定されGWを飾る。それに対して、桃節句は子育行事として生き存えた。

＜図表1＞五節句

和名	日付	別名
人日（じんじつ）	一月七日（一月一日）	七草節句
上巳（じょうし）	三月三日	桃節句
端午（たんご）	五月五日	菖蒲節句
七夕（しちせき）	七月七日	たなばた笹竹節句
重陽（ちょうよう）	九月九日	菊節句

（メディア開発綜研2024©）

曲水の宴

五節句の一つ上巳節句は、中国では「曲水の宴」。水辺（川・池・湖）で禊をする。禊＝神道という解釈は我田引水。禊の風習は広く世界中で見られる。古代中国『三国志』を描いた歴史ドラマでも、曹操たちが酒盃を回すシーンがあった。何事も唐風好みの朝廷はこれを取り入れ、奈良・平安時代、池のある庭園で酒盃・和歌で祝った。この様子は後世、絵画にアルカディアの如く描かれている。優雅王朝絵巻は鎌倉期に消え、闘茶・闘犬・闘鶏＋連歌と武家風文化に変容。曲水の宴は現在、復古的イベントとして開催。

江戸時代、上巳節句は縁者・諸芸師匠・商売得意先に贈答品を贈った。江戸年中行事に盛んな様子が見え、主に大人の行事。贈り物は白酒（江戸ならば豊島屋）、蛤、栄螺、季節野菜が相場らしい。

桃節句

桃節句の名称は桃の花が咲く季節で名付けられた。日本では同時に桜・山吹、そして菜の花も咲く。古来中国では、桃は邪気を払う＜仙果＞として珍重。日本神話でも桃はイザナギが黄泉の帰り道で重要な役割を担う*[1]。桃節句が現在の人形を中心とした雛祭りになったのは、江戸時代。これは推測だが、十二単を着た女性を人形として仮置きした、いわば代用品？　もう一つの流れは古俗からある禊としての＜流し＞の習慣。

旧暦三月三日は春の暖かさで、「山遊び」「潮干狩り」と野外ピクニック的要素も濃い。これが雛遊び、さらに人形を中心とした雛祭りになるのは都市文化／消費文化の進展が大きいと考えられる**＜図表2＞**。

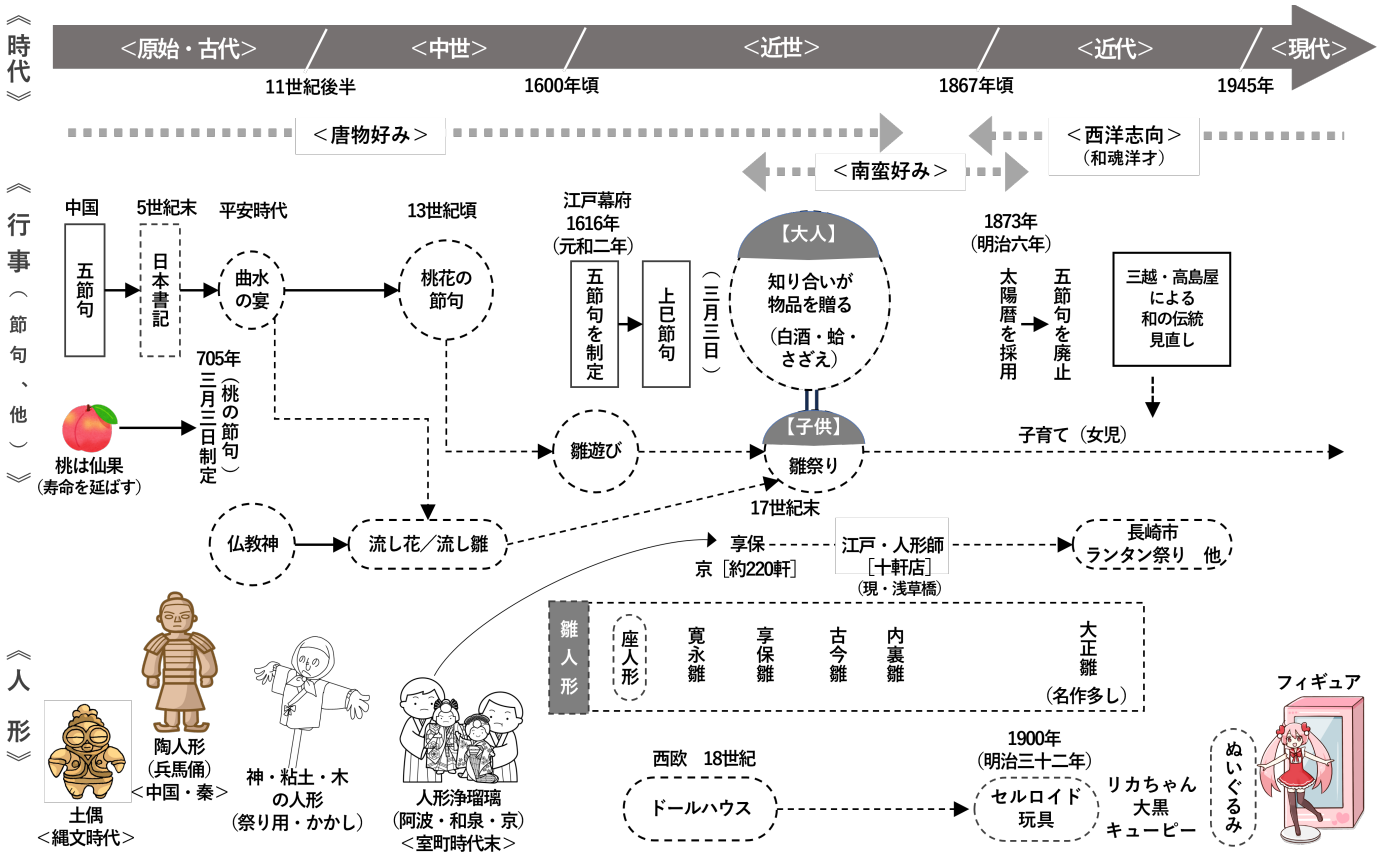
承

人形の多様性

人形は洞窟画と並んで最も古い表現形態。我国では縄文時代の土偶から始まる。宗教・祭礼・葬送用として古くから作られてきた。人形を「ひとかた」「かたしろ」と呼ぶところに、人形の本質が出ている。

人形は、①宗教②遊具③美術④芸能⑤鑑賞⑥実用と、様々な役割を持つ。案山子は農業生産のため、子供用ドールハウスや着せ替え人形は玩具遊具＋教育用。実物大人形はマヌカンや事故実験に多用される。芸術演芸としては文楽浄瑠璃があり、阿波では室町後期まで遡れる。また腹話術も世界的パフォーマンスである。

＜図表2＞五節句から雛祭りへ



（一般社団法人日本ホビー協会『ホビー白書2013』年表、
日本生活学会『生活学論叢』Vol.36-37 2020 論文「明治期讀賣新聞にみる雛祭りの普及過程―雛遊びから雛祭りへ―」、他を元に作成）

素材は人形を決定するもので、時代とともに変遷してきた。泥・粘土・紙・布・木・陶器・セルロイド・プラスチック・ビニール・レジン・金属と、時代によってさまざまな素材で製作されてきた。一般に人形は小さく可愛いものがほとんどを占めるが、等身大、ものによっては巨大人形まで千差万別である。伝統的雛人形は主に粘土・木・布で構成され、紙製流し雛・木彫り人形・吊り飾り人形も一部で見られる。

さらに人形には静態的なものと、カラクリ人形・自動人形のような動態に分かれる。この究極の発展系はロボット・サイボークかも**＜図表3＞**。

最近の人形は人よりも動物・メディアアイコンのぬいぐるみが玩具主流となっている。熊・犬・猫・ペンギン・イルカから、マンガ・アニメ・ゲームなどで描かれたぬいぐるみも人形である。代表的なものとして、テディベア・スヌーピー・トトロ・ピカチュウを挙げておく。

人形市の賑わい

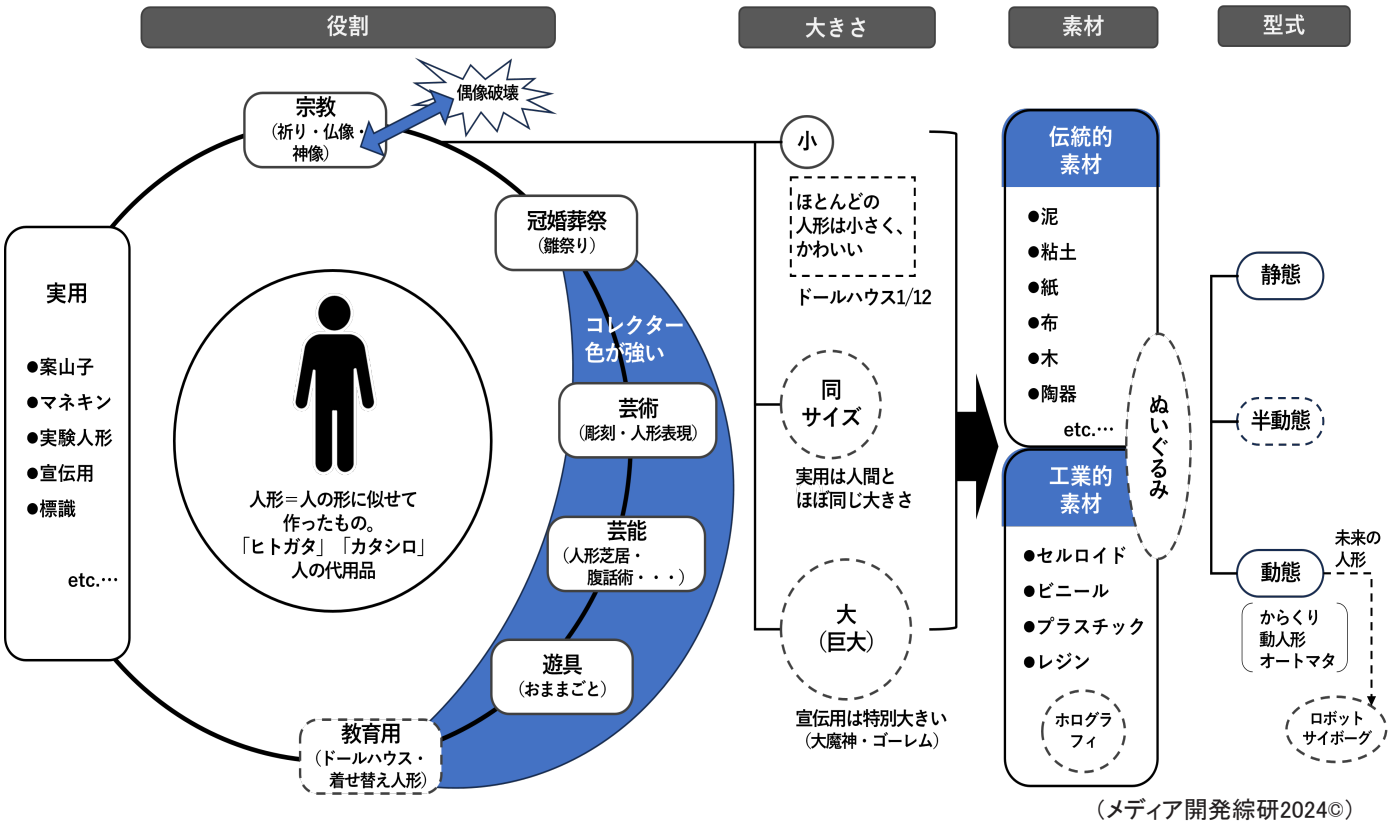
江戸中期には雛人形は武家・富裕商家に普及し、十九世紀には町家にも広まった。現在遡れるのは江戸初期の寛永雛だが、これは立雛から現在の内裏雛（座り雛）に移行する中間的な形態。古い形の雛人形は素朴な紙製流し雛という考察もある。祭りとしての精霊流しは現在長崎市ランタン祭りが有名。手製の舟を流し亡くなった人の霊を慰めるもので、海辺の各地にこうした風習が残っている。

江戸中期に普及した雛人形は江戸末期を描いた『江戸府内絵本風俗往来』によると、＜上巳節句前の二月二十五日～三月二日に十軒店で人形市が立つ＞とある。これは年末の縁起物熊手同様に相当ふっかけた値段がつけられた。人形市の中心は内裏雛。

伝統工芸としての人形作り

伝統工芸としての人形作りは博多人形・阿波人形と各地にあり、雛人形は江戸時代、京ついで江戸十軒店（現在の浅草橋）、明治期輸出を主体とした静岡・横浜も産地。江戸人形店の多くは武州岩槻・鴻巣で人

＜図表3＞人形の多様性



（メディア開発綜研2024©）

＜図表4＞雛祭りと花火大会

比較項目	雛祭り	花火大会
会場	屋内（家・美術館等） ※街歩きは例外	屋外 （川・湖・海）
スタイル	鑑賞・遊び	祭り
規模	数人～数千人	数千人～百万人
期間	三月三日 （ひな人形は2-3週間展示）	2～3時間
予算規模	～数百万円	～10億円
イベント数	100イベント以上	約1,000イベント

（メディア開発綜研2024©）

形生産を行っている。現在でも浅草橋は多くの人形店が集積し、久月をはじめ老舗は岩槻に生産拠点を持っている。明治・大正期はかつて中仙道宿場町であった鴻巣も人形産地として知られた。大正時代の埼玉県資料を見ると、岩槻3軒・鴻巣44軒と圧倒。鴻巣宿の加宿だった東問村の三軒茶屋の泥人形が発展したものとして、「岩槻に及ばない」と書かれている*2。岩槻は日光街道、鴻巣は中山道で文物情報が京江戸を往来。なを『ホビー白書』を刊行していた社団法人日本ホビー協会は、設立当初ホビー人形作りに注力していた。現在でもドールハウス・デコといったミニチュア制作は、ホビークラフトの一分野として定着している。

転／伝統的な町で

花火大会の一割

雛祭りは女児のいる家庭で行われ、お雛様（雛人形）を飾る。幼稚園でも盛んだが、昨今定着したハロウィン仮装と比較するといささか地味かも。全国イベント情報を集めている「ウォーカープラス」（旧東京ウォーカー、2/15付）によると、雛祭り祭事は全国104と花火大会の約1/10となっている。ウォーカープラスには各県展示会・商店街催事が漏れているものがあり、実際にはこれより多い。

雛祭りと花火大会は共に視覚中心の祭事だが対照的。静態と動態。場所が屋内と屋外（河原・湖・海）とロケーションは異なる。花火大会は数日とか観光用のように毎日打ち上げる花火もあるが、多くはコンサートやスポーツ同様二時間程度でプログラムが組まれている。開催場所がオープンで広く、何十万人もの人が集まる。長岡など数億円以上の予算を使う花火大会はマラソンやコンサートと並ぶビックイベント。暗闇の夜空に華々しい花火の広がり、炸裂する音、立ち込もる火薬独特の匂い。次々に組み合わされた創作花火は、大観衆と相まって夏最も盛り上がる。一方ひな祭りは家庭では数人のおままごと遊び。各地のひな祭りイベントもほとんどは人形を静かに鑑賞する＜図表4＞。

古都が多い

各地のひな祭りイベントは＜図表5＞の通り。

京・大坂・江戸三都物語をはじめ、旧城下町や古くからの商都や宿場町が目立つ。また湊町でも不思議と立派な雛人形を見ることが多い。伊予八幡浜、安房勝浦・・・。老舗の旅籠、旧家も捨てがたい。各地の博物館・美術館も積極的。三井・三菱（静嘉堂文庫）は富豪令嬢、大名系博物館も定番。富豪といえば武州・遠山記念館や信州須坂田中本家も立派。

もう一つは人形玩具専門美術館館で、岩槻人形博物館をはじめ横浜人形の家、姫路市日本玩具博物館ではさまざまな雛人形の比較ができる。

特徴ある「吊るし雛」は柳川市「下げもん祭り」、八日市「吊るし雛まつり」（花巻市）、伊豆稲取で見られる。

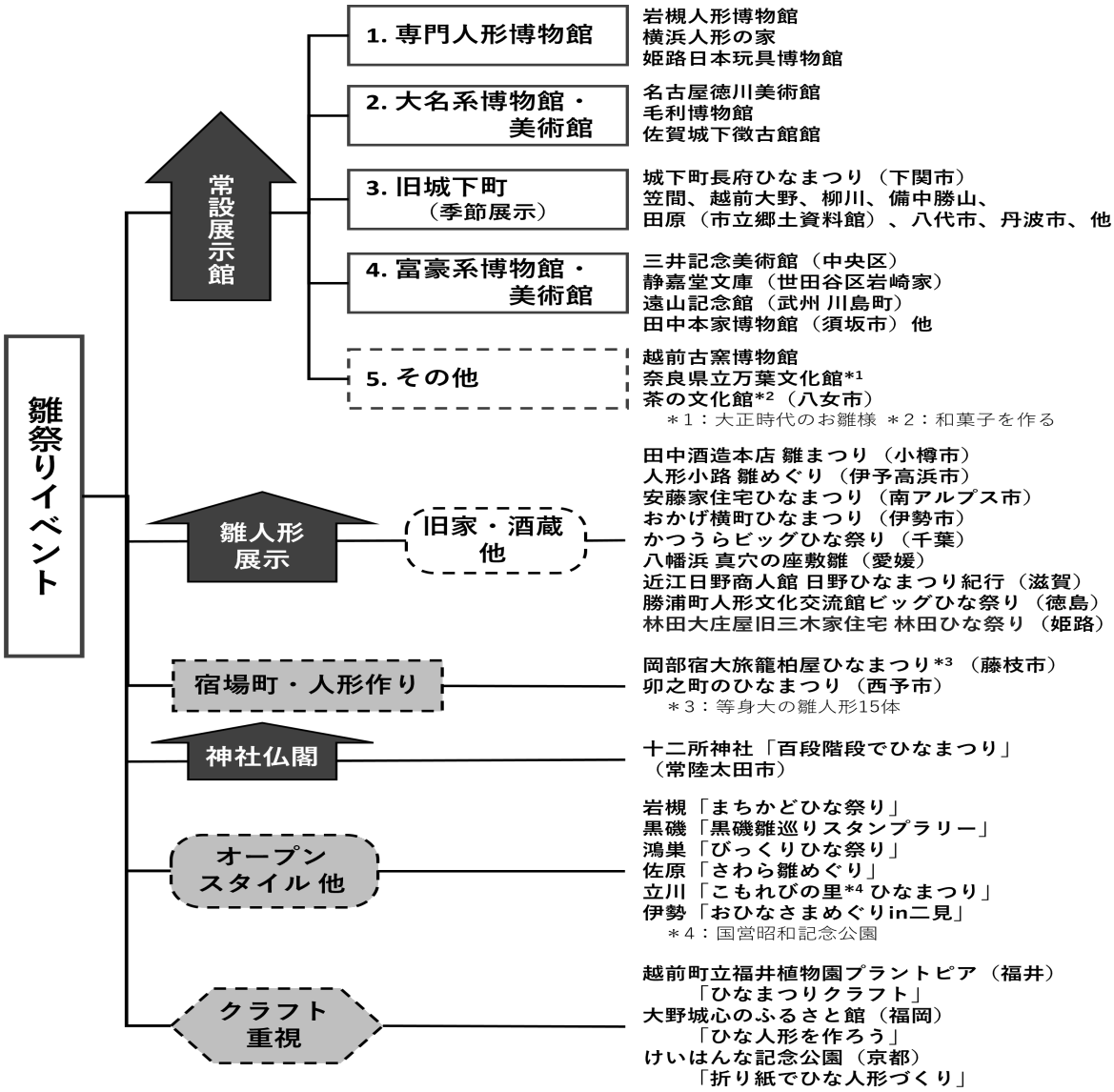
出色なのは全国雛人形を集めた東京目黒雅叙園百段階段の一大展示。これまで九州・東北と地区別で人形展示し、マスコミでも大きく取り上げられた。全国各地の特色ある雛人形を知った。三島市佐野美術館では戦前作られたマイクロ雛人形というユニークな

展示会もあった。

また、桃節句・雛祭りを観光や町おこしとして位置付けているところも少なくない。佐原市の運河舟と連動した町巡りやスタンプラリーも一般的。正月流行している七福神巡りや花見と似ている。

展示に工夫した雛祭りもある。鴻巣市は三階に相当する大ピラミットを作って千数百体の雛人形を展示し、話題を攫った。これも二十年になる。神社の階段を使って展示する手法も各地に見られる。常陸太子十二所神社は百階段、伊豆稲取や武州飯能でも神

＜図表5＞各地の雛祭りイベント



（『ウォーカープラス』及び各イベントHPを元に作成）

＜図表6＞雛人形の変遷

立雛	最も古く、紙で作られた「ひとがた」が変化
寛永雛	女雛は両袖を広げ、立雛から座雛への過渡的人形
享保雛	面長の顔が特長で、別名「芋雛」
古今雛	主に江戸制作で、目にガラス玉を入れたり十二単に豪華な刺繍を施したもの
次郎左衛門雛	京の人形師・雛屋次郎左衛門が生み出した丸顔の人形
有職雛	公家・武家の有職故実に則った特注品

（岩槻人形博物館 企画展パンフレットより作成）

社階段を使った雛人形展示を見た。

見るだけでなく＜作る＞に力点を置いた人形制作、折紙人形に注力するイベントも見られる。人形が使用する端切れ布地といった要素もホビークラフトと関係深い。

雛人形の形

雛人形は寛永雛・享保雛・古今雛と時代にそって、顔や衣装が変化した**＜図表6＞**。現在三井記念美術館で特別展示されている、京都丸平文庫の二世大木平蔵（明治十年）から十七世大木平蔵まで見ると、顔の表情・衣装の違いがはっきり分かる。よく人形は顔が命と人形師は言うが、比較的小ぶりなものが多い雛人形は衣装や背景にある屏風、さらにミニチュアとしての道具類の作りにも目を惹かれる。

展示基本形は一対の内裏雛。京人形と関東人形では左右が異なる。また顔立ちや道具の差異もある。雛人形は普及するに従って三段・五段・七段となり、二十段の雛人形を見たことがある。最も目にするのは五段飾りだが、住宅事情が一軒家から集合住宅に変化し、収納ケース付きの内裏雛、コンパクトな三段が増えている。

本年二月に浅草橋人形店を一巡したところ、有名人形師の五段飾りは数百万円、フツーの雛人形は数十万円くらい。著名人形師内裏雛で二十万円前後。いずれにしろ玩具としては高価で家具扱いだが、一年に数日から二、三週間の可動である。なを五段飾りになると収納も結構大変だった。

結／素敵な季節行事

時代と共に

伝統的祭事も時代によって形や中身を変える。旧暦で農業を中心とした祭事と都市化された街中及び家庭での行事は違いが大きい。人形も手作りの素朴なものから専門職人の手によるものになった。阿波踊りや郡上八幡踊りを見ても、数十年の歳月で形やリズムは大きく変化した。ハロウィンが盛んになるに一方、クリスマス（ハッピー・ホリディ）がかってほど盛り上がらないと思うのはどうだろうか。

今や新春や初仕事の時に、晴着を着た女性を見ることは稀。下手にそんなことを書くと昭和世代の「●□ハラ」と言われかねない。逆に、成人式や卒業式では着慣れない振袖や袴姿をよく見かける。ネットでは「着こなしがなっていない」「模様が派手なだけのレンタル着物」という意見もあるが、人生の区切りを大切にすることは意義深い。

雛人形にもキティちゃんやリカちゃんのような人気アイテムが登場するのも、メディアアイコン時代で否定する必要はない。

感動したのは目黒雅叙園百段階段の華やかな雛人形だけでない。八幡浜民家で見た大ぶりの五段飾り。大空襲で自宅は焼けたが土蔵蔵で焼け残った大正期の品の良い五段飾り（墨田区郷土館）である。

子育て行事としての雛祭りはハロウィンや恵方巻きのような大宣伝がないだけに、かえって好ましく感じられる。雛祭りは素晴らしい季節行事である。

*1：桃といっても、現在のような大ぶりではなかった

*2：『中仙道を歩く』児玉幸多著・中公文庫（1988年10月）